■第１回北東アジア観光国際フォーラム（2004年８月、中国大連）

ERINA調査研究部研究員　川村　和美

2004年８月19日、遼寧省旅游局、大連市旅游局、吉林旅游局、黒龍江省旅游局の主催、韓国大邱旅游協会、アジア太平洋旅游協会、日本北東アジア観光研究会などの後援により、大連市にて第１回北東アジア観光国際フォーラム（2004大連）が開催された。この会議には、大学教授・研究者などを中心に、中国代表約30名、韓国代表約15名、日本代表7名が参加した。１日の会議であるにもかかわらず、約50名の参加者の半数に当たる25名が“北東アジアの観光”をテーマに報告を行うといった大変盛りだくさんの内容となった。

観光に関する会議となると、とかく自国・地域への観光客の誘致に向けたPRが主となりがちである。今回のフォーラムにおいてもそうした報告が無かったとは言えないが、大半が“北東アジアの観光”をいかに促進すべきか、その魅力や問題点に関する報告であったことが注目される。

中国社会科学院旅游経済研究センター主任・研究員の張広瑞氏は「辺境（国境）観光」をテーマに報告を行った。北東アジアの特徴の一つに国境が錯綜していることがあるが、この国境を観光資源として活用しようというアイディアである。国境を異国と接している魅力的な場所と位置付け、国境の街は相互の文化が融合する地域とし、国境を北東アジア各国の交流・協力の窓口、結束ポイントとして捉え、北東アジアの観光を促進していこうというものである。ロシアや北朝鮮と国境を接する東北地域の研究者ではなく、北京の研究者からこうした報告がなされたことが注目を集めた。

このような“国境観光”に関する報告は、吉林大学東北アジア研究院教授の王暁峰氏からも行われた。王氏は図們江地域を取り上げ、国を跨いだ観光の可能性をテーマに報告を行った。吉林大学東北アジア研究院は、図們江地域の中国と北朝鮮間に国を跨いだ貿易区の設置を提案し、国境都市の担当者と実施に向けた議論を重ねている。今回の報告は、そうした流れを受けたもので、図們江地域で中国・北朝鮮・ロシアの３カ国をめぐる観光ツアーの実施が提案された。この時に問題となるのがビザである。先に報告した張氏も指摘したが、観光を促進するためには、ビザなどの手続きがいかに簡単に行われるか、またその地域まで行きやすい交通手段があるかといった点がポイントとなる。ビザが必要でその取得手続きに時間がかかっていたり、何度も飛行機を乗り換えたり、長い時間をかけて、飛行機、列車、バスを乗り継がなければたどり着けない場所とあっては、観光客の増大は困難である。そこで、まずは３カ国をめぐる観光、または国を越えた観光のためのビザの取得の簡素化、あるいは観光のための通行許可証の発行などを各国の協力のもと、推進していくことが必要であると主張

された。

日本側からは、北東アジア観光研究会代表幹事の関山信之氏が、WTO（世界観光機関）による国際観光旅行者到着数の地域別予測伸び率（2000年～2010年）をみると、東アジア・太平洋地域が年率7.7％と最も高い数値（全世界平均は4.2％）であり、予測実績数は１億900万人と推定されていることを紹介し、この予測の中で北東アジアの地域がどの程度のウェイトを占めるかは定かではないが極めて大きなポテンシャルを秘めていることは間違いないと述べた。そして、今後はこのポテンシャルをいかにすれば引き出していくことができるかに視点を置かなければならないと主張した。その上で、北東アジアについて言えば、平和へのパスポートとなる“国境ツーリズム”、国境を越えた多様な先住民族の文化と歴史を探る“エスニック・ツーリズム”は主要な観光形態としてその内容が吟味される必要があり、また、北東アジアの歴史像の共有を探求する若者たちによる“歴史ツーリズム”、技術移転や人材育成を目的とし､内外不均衡を解消するための“産業ツーリズム”等の形態も検討されて良いのではないかとの提案を行った。

ERINAからは三橋郁雄特別研究員が報告を行った。北東アジアにおける観光交流を一層増大させていくためには、現在、観光交流が殆どなされていない地域同士の交流を盛んにするのが有効であり、それを実現するために各国関係者が共同で、北東アジアの観光マスタープランを作成することが望ましいと主張した。こうした共同作業を行なうことにより、各国の観光交流の発展要因、障害要因を把握すると共に促進に向けての知恵を出し合うことができるというものである。各国・地域の代表者を選出し、それぞれが各地の観光の現況、規制の現状、安全の現状、重点観光対象、観光内容、今後の地域開発の状況を整理し、現在の状況下で観光客を２倍にする方法、５倍にするための課題と施策を持ち寄り､議論を進めていくことが提案された。現在、北東アジア観光研究会がこの提案を受け、各国代表者の選出と議論の場の提供に向け､取り組みを始めている。

今回のフォーラムは、限られた時間内に多数の報告者が発表したため、質疑応答・議論の時間が取れなかったなど非常に残念な部分もあった。しかしながら、過去に北東アジア観光に関する多国間協議の場は極めて少なかっただけに、日中韓の三カ国とはいえ、多国間で北東アジアの観光に関する議論が行われたことの意義は大きい。フォーラムの閉会式では、北東アジア国際観光フォーラムのフラッグが韓国大邱旅游協会に渡され、来年、韓国大邱市において第2回北東アジア国際観光フォーラムが開催されることが発表された。